八難六奇の三浦義村

2023年9月3日（日）　於：関内ホール（小ホール）　下垣　有加

はじめに

鎌倉時代の武士である三浦義村。三浦義村の一般的なイメージといえば、「陰謀家・腹黒・裏切り者」といったところだろう。これらのイメージは概ね大河ドラマや小説で描かれた姿に起因する。これらは三浦義村の真実の姿なのだろうか。史料を紐解いて検証する。

１、三浦一族とは

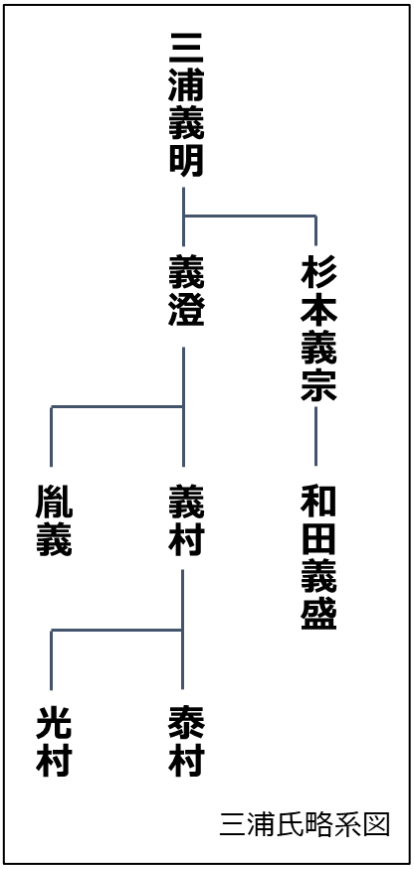
三浦氏→関東平氏の一流で、相模三浦郡を本拠に
在庁官人となった豪族

・桓武平氏良文流とされているが近年再検討されている。

・三浦為継（奥州後三年記）→義継→義明（天養記・吾妻鏡）と河内源氏の家臣であり「源家累代の家人」であった。
※基本的に当時の主従関係は一代限りであるため珍しい。

・頼朝挙兵には計画段階から関わっていたが、石橋山合戦には川の増水で間に合わず、その頃はまだ平家方だった畠山重忠に敗れ義明は討ち取られる。

・義澄は鎌倉幕府内の有力者であり、頼朝死後は「13人の合議制」メンバーにも名を連ねた。



三浦氏略系図

用語解説

在庁官人：平安中期以降、各国の国衙で行政実務を担当した役人。
知行国主が派遣する目代のもとで地方出身の雑色や介以下の土着した国司が結集して留守所を形成し職を分掌、世襲化し国務を行った

国衙・国府：律令制下、地方支配の拠点として各国に設置した役所

知行国主：国の知行権を得た公卿などのこと

2、三浦義村について（1168年？～1239年）

・史料的な初出は『吾妻鏡』寿永元年(1182)八月大十一日条。
※北条政子の安産祈願のための奉幣使として

> 壽永元年八月大十一日己酉。及晩。御臺所有御産氣色。武衛渡御。諸人群集。
> 又依此御事。在國御家人等。近日多以參上。爲御祈祷。被立奉幣御使於伊豆筥根兩所權現并近國宮社。所謂。
>
> 伊豆山〔土肥弥太郎〕　筥根〔佐野太郎〕
> 相摸一山〔梶原平次〕　三浦十二天〔佐原十郎〕
> 武藏六所宮〔葛西三郎〕　常陸鹿嶋〔小栗十郎〕
> 上総一宮〔小權介良常〕　下総香取社〔千葉小太郎〕
> 安房東条庤〔三浦平六〕　同國洲崎社〔安西三郎〕
>
> 『吾妻鏡』

・『源平盛衰記』によると<u>合戦に参加できる年齢は17歳からとある</u>。義村が合戦に参加した記録として一番古いものは『吾妻鏡』元暦元年（1184）八月となるためこの年に17歳となったのではないか？（高橋2016）※元暦元年八月八日条

> 平家追討の軍兵今度上洛の時、鎌倉殿の侍所にて評定あり。
> **<u>十五六は少、十七以上は可上洛と被定たりけるに</u>**、小次郎十六也、有の儘に申ては御免あらじ、十七と名乗て父が伴せんと思ければ、鎌倉にて其定に申。
> 『源平盛衰記　第三十七　平家開城戸口並源平侍合戦事』

・正治二年（1200）に父・義澄が死去すると33歳で三浦一族を率いる立場となる。

3、畠山重忠討伐と牧氏事件

・実朝の御台所と決まった坊門信清の娘を迎えに行くために上洛中の北条政範（北条時政と牧の方の間にできた男子）が急死。
→上洛中に平賀朝雅の邸宅で開かれた宴の最中に政範と畠山重保（重忠の子）が口論
→1205年6月21日、牧の方は畠山重忠親子を征伐してしまおうと時政に相談
時政は北条義時と時房の二人に話をする。※義時は難色を示しはする
→1205年6月22日、時政の命により、義村は重保を殺害する
※祖父義明が重忠に殺されているため敵討ちの意もあったのか？

用語解説

牧の方　：鎌倉幕府の初代執権・北条時政の継室
平賀朝雅：清和源氏義光流。京都守護。妻は時政と牧の方の娘。
畠山重忠：鎌倉幕府の有力御家人。秩父党。知勇兼備の武将と名高い。

→1205年閏7月19日、牧の方が実朝を害し、平賀朝雅を将軍にしようとしているという謀反の噂がたつ。政子は義村に相談し実朝を保護。時政は出家。

4、和田合戦

1213年、義時に挑発された和田一族は、義時に対する不満が抑えきれなくなる。

→義村は、はじめは義盛に味方すると起請文まで書いたが、直前にその約束を反故にし義時につくことにする。

> 建暦三年五月小二日壬寅。陰。〈略〉次三浦平六左衛門尉義村。同九郎右衛門尉胤義等。始者与義盛成一諾。可警固北門之由。乍書同心起請文。後者令改變之。兄弟各相議云。曩祖三浦平太郎爲継。奉属八幡殿。征奥州武衡家衡以降。飽所啄其恩祿也。今就内親之勸。忽奉射累代主君者。定不可遁天譴者歟。早飜先非。可告申彼内儀之趣。及後悔。則参入相州御亭。申義盛已出軍之由。〈略〉
>
> 『吾妻鏡』

○義村が和田義盛（伯父）につかなかった理由

→三浦一族と和田一族の間に摩擦があったのではないか？

三浦義村は左衛門尉、弟の胤義は右衛門尉

比べて和田義盛は侍所別当であり左衛門尉、他にも４名が任官

→和田氏が総領家である三浦氏を凌駕し地位を確立していた。

『愚管抄　第六　順徳』に「義盛左衛門という三浦の長者、義時を深くそねみ」とある→長者＝三浦一門の長の意。京都朝廷的な考え方では、官位も年齢も上の義盛が三浦一族の上位であると見えていたのでは（高橋2016）

※合戦後、北条義時は侍所別当となる。

※北条氏は山内荘・六浦荘など相模国に荘園を獲得。

5、実朝暗殺

建保7年（1219）正月二十七日、実朝が公暁（こうぎょう）に暗殺される。

→公暁（こうぎょう）＝頼家の息子。一般的に三浦義村が乳母夫であったっとされるが、吾妻鏡の記事の誤読の可能性（高橋2021）がある。

※『吾妻鏡』建永元年十月二十日条、実朝の養子となった善哉（公暁）が「乳母夫の義村が御賜物を献じた」という記事が根拠とされるが、「御賜物」は通常親側の関係者から贈られることが常であり（貴族の日記など）、したがって義村は実朝の後見人という意味の「乳母夫」と解釈すべきではないか？

用語解説

和田義盛：鎌倉幕府の初代侍所別当（侍別当）、三浦一族の庶流和田氏の祖
侍　所　：御家人招集・隋兵奉行・罪人収監※いまでいう警察・軍司司令部

初代別当：和田義盛/所司：梶原景時

→公暁は実朝を討ったあと、三浦義村の屋敷に向かおうとした。

『愚管抄』ではこの理由を「一ノ郎党と思しき」と記載している。

※『吾妻鏡』は義村の息男である駒若丸が門弟に列していたためとする。

→結果、公暁は義村の家臣の長尾定景に討ち取られる。

○ちまたにあふれる実朝暗殺黒幕説

1『北条義時黒幕説』

『吾妻鏡』に記載された義時の行動を重視しているがこれ自体が大倉薬師堂の霊験譚が元ネタである。そのため義時の行動については『愚管抄』を参照すべきであり、『愚管抄』では義時も公暁の暗殺対象であるため成立しない。

2『三浦義村黒幕説』

そもそも北条氏と三浦氏の対立関係があることが前提となっている。

（ここまで対立関係にはない）

3『後鳥羽上皇説』

不仲説がとられているが、後鳥羽上皇は実朝から忠誠を誓う和歌を贈られているし、自らの子を鎌倉に下向させ、その後見となる実朝の官位を昇らせること自体は不自然ではない。

4『公暁単独説』

上記の論に史料的根拠が乏しいため、単独説が有力である。実朝を亡き者にすれば自分が将軍になることができると踏んだ公暁の行動ゆえではないか。

・**承久元年（1219）11月、三浦義村は駿河守になる**『関東評定伝』ー史料①

→頼朝期……源氏一族・京下りの官僚のみ国司になれた

→頼朝死後…北条氏は国司になっている（北条氏は頼朝の親戚ではある）

よって、三浦義村の駿河守就任は異例

※北条氏以外、御家人として初めての受領補任

→北条氏にとっては、三浦氏との連携強化を図る意図がある。

用語解説

国　司　：律令制のもとで諸国を治めるために設置された役職。
京都朝廷から指名される。

守　護　：諸国の治安維持や、武士の統制を主な役割とする。幕府から任命される。

６、承久の乱

実朝没後、幕府は後鳥羽上皇の皇子に下向を求める。

→後鳥羽上皇は、舞女亀菊の所領の地頭職撤廃を鎌倉幕府に要求

→義時はこれを拒否

→後鳥羽院、皇子の下向を拒否

→これをうけて義村が思案して※国史大系では義村は義時の誤字ではとなっている

「左大臣九条道家様のご子息をお迎えしたい」といい、道家の子・三寅

（藤原頼経）が鎌倉に下向することになる。

> イカニサテ此宮所望ノコトヲ上皇キコシメシテ。イカニ将来ニコノ日本國二ニ分ル事ヲバシヲカンゾ。コハイカニト有マジキ事ニ思召テ。エアラジト仰ラレニケリ。其御返事ニ。次々ノタダノ人ハ関白摂政ノ子ナリトモ申サンニシタガフベシナド云タダノ御詞ノアリケル。コレニトリツキテ。又モトヨリ義村〇或は義時の誤。ガ思ヨリテ。コノ上ニハ何カ候マジ。左大臣〔道家〕殿ノ御子ノ三位〔教実〕ノ少将殿ヲノボリテムカヘマイラセ候ナント云ケリ
>
> 『愚管抄　第六　順徳』〈抜粋〉

承久三年（1221）5月14日、後鳥羽は「流鏑馬揃え」を口実に兵を招集。

→5月15日、親幕派の公卿を幽閉、招集を拒んだ京都守護伊賀光季を襲撃。

→同日、北条義時追討の院宣を発する。

→5月19日、伊賀光季からの急報、鎌倉に到着。（有名な政子の演説この日）

三浦胤義が兄義村に京方へ誘う書状も鎌倉に到着《義村これを拒否》

→5月21日、京へ向けて北条泰時先発。22日～25日にかけて、名のある御家人たちは京へ向けて出発

→5月25日条、軍勢は全体で19万騎。

> 承久三年五月大廿五日戊申。自去廿二日。至今曉。於可然東士者。悉以上洛。於京兆所記置其交名也。各東海東山北陸分三道可上洛之由。定下之。軍士惣十九萬騎也。
>
> 東海道大將軍〔從軍十万余騎云々〕
>
> 相州　武州　同太郎　武藏前司義氏　駿河前司義村　千葉介胤綱
>
> 東山道大將軍〔從軍五万余騎云々〕
>
> 武田五郎信光　小笠原次郎長清　小山新左衛門尉朝長　結城左衛門尉朝光
>
> 北陸道大將軍〔從軍四万余騎云々〕
>
> 式部丞朝時　結城七郎朝廣　佐々木太郎信實
>
> 今日及黄昏。武州至駿河國。爰安東兵衛尉忠家。此間有背右京兆之命事。籠居當國。聞武州上洛。廻駕來加。武州云。客者勘發人也。同道不可然歟云々。忠家云。存義者無爲時事也。爲棄命於軍旅。進發上者。雖不被申鎌倉。有何事乎者。遂以扈從云々。
>
> 『吾妻鏡』

結果、幕府方が勝利し、後鳥羽上皇は隠岐に順徳上皇は佐渡に、土御門天皇は讃岐にそれぞれ配流される。仲恭天皇は廃位、新天皇は後堀河天皇に。

○承久の乱の戦後処理と三浦義村

6月15日、三浦義村は関東（幕府）から宮中守護の任を命じられる。

『承久三年四年日次記（ひなみき）』ー史料②

院が配流されたのち、一旦幕府が抑えた院の所領を後高倉院に進上する（ただし幕府が必要なときには返してほしいという）旨の申し入れを義村が行っている。

『武家年代記』裏書ー史料③

7月7日、義村は茂仁親子北白河殿に行き、拝み倒して践祚を承諾してもらう。

※新天皇の即位に義村が深く関与している

『賀茂旧記』ー史料④

義村がこうした重要な役割をつとめられたのは、五位の位階と駿河守という官職を得て、貴族社会のメンバーシップを獲得していたからである。（高橋2021）

7、伊賀氏事件

通説的には、義時の後妻の伊賀の方が、兄弟の伊賀光宗とはかって義時の嫡子泰時ではなく、実子の政村を執権とし、女婿の藤原実雅を将軍に擁立しようとしたとされる事件。

→事件の真相はさておき、北条政村の烏帽子親は三浦義村であったため、
　政子が真っ先に義村を牽制している（貞應三年（1224）七月十八日条）
　→義村は翌日泰時邸を訪問して釈明している。（義村にとって泰時は娘婿）

結果、伊賀光宗は所領を没収され配流される（ただし政子の死後所領を回復し、のちに評定衆にもなっている。政村も罪に問われていない（後に執権に）

用語解説

伊賀の方：義時の後妻。北条政村の母。
北条政村：鎌倉幕府7代執権。評定衆や連署などの職を経て、1264年に執権となる。
後家の権利：夫なきあと妻は跡取りや遺産配分などを決める権利がある

８、義村の最期・評価

『吾妻鏡』延應元年(1239)十二月五日条《抜粋》

延應元年十二月大五日庚子。未刻。前駿河守正五位下平朝臣義村卒。頓死。大中風云々。入夜。前武州向故駿河前司第。令訪彼賢息等給。

（読下し）未刻。前駿河守　正五位下 平朝臣義村卒す。頓死。大中風と云々。
夜に入り、前武州故駿河前司の第へ向ひ、彼の賢息等を訪い令め給ふ。

（現代語）午後二時頃に、前駿河守正五位下平朝臣三浦義村が亡くなった。
急死。頭の関係（脳溢血など）だったとのこと。夜になって泰時は義村の屋敷へ向かい、彼の息子達にお悔みを伝えた。

『明月記』嘉禄元年（1225）十一月十九日条《抜粋・現代語訳》

近日藤原実雅の旧妻（義時の長女）が上洛するとのことである。源通資の子（通時）に嫁すとのことである。三浦義村が源通時の知行する荘園の地頭であったところ、長年通時は地頭の義村を訴えることもなかったため、義村は通時を好人物だと感じ入ったためこうした婚姻が成立したとのことである。私（藤原定家）がひそかに考えるところでは、これは三浦義村の八難六輝の謀略であり、彼は不可思議な人物である～（略）

「義村八難六奇之謀略、不可思議者歟」

→「八難」は張良、「六奇」は陳平いずれも前漢の劉邦に仕えた軍師。

したがって、この二人に匹敵するような策略家であるという意味である。
（わけがわからない人という意味ではない）

「実雅卿旧妻近日入洛、可嫁通時朝臣云々、義村為知行庄之地 頭、年来不被訴、心操為上郎由成感、有此婚姻之儀云々、竊案、義村八難六奇之謀略、不可思議者歟、若依思孫王 儲王用外舅歟、近日被聴昇殿云々、老幸之時也、後聞、昇殿僻事云々」
『明月記』

○三浦一族の全盛期を支えた人物であり、立ち回りが非常に上手い。

○義時や政子からの信頼が厚く（ひるがえって脅威でもあり）、承久の乱の戦後処理をまかされるような能臣。

○裏切り者のイメージがあるが、生涯義時（や幕府）に忠誠を尽くした。

○京都の貴族からみても、非常に優秀な人物であり、彼らのもっていた坂東武者のイメージとはそぐわず、畏怖も含あって不思議な人物として映っていたのではないか。

参照文献等

高橋秀樹『三浦一族の研究』吉川弘文館2016

細川重男『宝治合戦　北条得宗家と三浦一族の最終戦争』朝日新書2022

伊藤一美『大庭御厨に生きる人々』藤沢市文書館2015

高橋秀樹『北条氏と三浦氏』吉川弘文館2021

新日本古典文学体系『保元物語・平治物語・承久記』岩波書店1992

『新版　日本史辞典』角川書店1996

史料で読む三浦一族①～④〈三浦一族研究会　2020年全４回講座〉　講師：真鍋淳哉

吾妻鏡入門　http://adumakagami.web.fc2.com/aduma00-00mokuji.html

★2023年10月に、吉川弘文館・人物叢書から『三浦義村』高橋秀樹著がでます！

主な参照史料の性格

吾妻鏡　鎌倉幕府将軍の年代記というスタイルをとる歴史書として編纂されたものである。治承四年（1180）四月九日条「以仁王の令旨」が出された記事からはじまり、文永三年（1266）七月二十日条で終わる
編纂された時期には御家人の家の内部で所領をめぐる争いが激化しており、それが『吾妻鏡』編纂と大きな関係があったと考えられる。
幕府を形成し、その後の執権政治を担ってきた御家人の家々は、この時期に動揺がはじまっており、そこで彼らの家の形成の歴史を遡って探ることで、家の建て直しを行おうとしたことや、改めて朝廷に対して幕府がいかなるものかを問う意図などもあって編纂された。
北条氏を顕彰するための曲筆が問われることもあるものの、おおむね素直に受け取って差し支えない※あくまで成立年代1300年ごろの認識（そのころ残っていた史料を参照している）という意味。史料批判はもちろん必要。

愚管抄　1219年に、前天台座主・大僧正**慈円**が著した歴史書。
※慈円の思想や仏教的な哲学思想を理解する必要がある。

明月記　鎌倉時代の公家である藤原定家の日記。治承4年（1180年）から嘉禎元年（1235年）までの56年間にわたる記録。

史料

史料④『横須賀市史』資料編古代・中世補遺『吾妻鏡』

同七月七日、
日御へらるにつかはせるが、
河殿にまいりて、宮はめりだしまいらせて、同九

史料③『武家年代記裏書』（大日本史料総合データベース）

武家年代記
永久三年
以先院御願所々、被進高倉院、但武家要
用之時者可返給之由、以義村朝臣被申入了、則被許云々、

史料②『承久三年四年日次記』（大日本史料総合データベース）

承久三年四年日次記
六月十五日戊辰、刻大夫史國宗為勅使、令向軍陣
六條川原、官掌二人、使部二十人、雑色二人、相具之、主典代中宮權大屬中原俊
職、被副之、是關東武士為故右府賢朝公家司、能令知案内之故也、其時武士不
知幾千萬、其中武藏守泰時、駿河守義村、朝夕立面下馬、仰勅定之趣、時朝臣
道手立面下馬、仰勅定之趣、時朝臣、道
逆兼參入帝都不可有猶豫、大少事任申請可有聖斷之由也、各承仰可停止禁
中參入之由申上之其上可見知、内裏仙洞等在所之由申之、進武士軍其中駿
河守義村別可守護宮中之由、有關東令、差遣右近將監頼重等者也、
十七日庚午、諸衛陣解官軍可還補本官之由被仰下之、洛中遠土無所遁追
捕之難云々、
十八日辛未、可召返陸奥守平義時朝臣追討宣旨之由被下綸旨

史料①『関東評定伝』（大日本史料総合データベース）

関東評定伝
任駿河守同日宣旨
前駿河守平義村
承久元年十一月十三日

当日の質疑応答

Q　義時と義村が仲が良かったという史料的根拠はあるのか

A　史料的根拠はないが、結果として義村は幕府を裏切って
いないといえるため、したがって義時のことも裏切ってはいない
ゆえに、ビジネスパートナーとしては良い関係ではあったと
言えると思う

Q　三浦と北条の不仲説はどこからでてきたのか

A　永井路子先生の小説の影響は大きかったと思う。また、
義村の子供の泰村の代で、「宝治合戦」がおこり、
結果として北条氏によって三浦一族は滅んでしまう
（生き残った三浦一族もいますが）
（いやあれだって北条のTOPと三浦のTOPはお互い争いに
したくなくてめちゃくちゃ調整していたところに安達…）
その印象があるため、後世そういうように言われるのではないか

Q　義村はなぜ直前になってから和田義盛を裏切ったのか

A　義村も悩んで悩んで、そのすえに「源氏累代の家人」という
三浦一族の矜持が勝ったのではないか

Q　和田義盛（の父）は長男なのに家督を継げていないから、
本来は和田のほうが主流だったのではないか

A　当時の嫡男は長男だからといってきまるのではなく、
一般的には母の血筋によるので、義盛の父が長男だけど
庶流になったのではないかと思うが、当時の坂東の史料が
あまりにもないので、実際どうだったかはわからない
（あと、義盛の父はわりと早くに亡くなってしまってもいる
ようなので…）